

智と芸術への旅

大橋 一隆 智のシンポジウム事務局長・松土社企画
sym_ohashi@yahoo.co.jp ※感想等、大歓迎です！

概要

我々人類の智とは何か？そして、次の世代に手渡せるものは何か？智を芸術にすることが出来るのか？制度化された知とは？題材として、スクリービン「神秘劇序章」やSF小説などの芸術作品を扱う。智の本質について議論するための場となれば幸いである。

目的

本発表の目的は下記の通りである。

- ① 人類の智を見直す契機となることを狙っている。
- ② 「排除された知」について取り扱うための序章であり、特に、アカデミズムから追放された知について考察する手がかりとなる契機とする。
- ③ 貴重な手がかりとして、音楽や文学作品の芸術作品をいくつかの例として扱う。
- ④ 芸術作品に限らず身近な事物でも、多面的な観点で見ると興味深く、発見が多く考えさせられる。
- ⑤ ささやかながらでも、若手研究者への応援メッセージとなれば幸いである。

背景 経緯と動機

これまで、筆者がどのような問題を考えてきたかについて述べる。個人的なものであるが、これまでの「私の」智と芸術の旅の記録である。

理系の大学へ入学後、高校時代の同級生僚友 A 氏の影響から文系の研究者を経由して、思想家になることを志した。個人的に、 明治大学・中村雄二郎先生、栗本慎一郎先生、早稲田大学・加藤諦三先生に師事した。文系の大学院への進学を考えたが、結局理系の大学院へ進学することになり、工学系の大学院で博士号取得した。理系の大学院へ進学は、中村先生からのアドバイスで、若いうちでないと理科系の学問は身につかないからというものであった。

高校時代の同級生であった彼女 A 氏との出会いを通じて考えるようになった問題「人は生まれないほうが良く、死は生に勝る」（参考文献 1）であり、中間報告は、参考文献 1 にまとめておいた。地獄のようなこの世になぜ人は生まれ、生きていかなければならないのか？

個人的な事情により、1年ほど前の 2016 年 1 月頃に、大きな挫折を味わった。些細な事で因縁をつけられ、名誉を棄損された事件があり、手にすべきものを多く失った。この事件を契機に、「運」というものを軽視してきたのでは？という問題意識が強くなり、これまでの思索について再考することとなった。

「運」を扱うものとしては、運命学や占星術など これらは、大学をはじめとするアカデミズムから排除された知の一つとなっている。他にも、趣味（ホビー）、オカルト、スピリチュアル、UFO などの多くのジャンルがある。参考までに、日本の図書館で用いられている NDC（日本図書十進分類法）での取扱について見てみると、いちおうこのような分野は、超心理学や文化などに入れることにしているようである。公立図書館での収集方針では、一部の分野については、著名な作品や有名な著者の一部の作品を中心に、限定的に収集することになっており、なおかつ発行年 1 年以内に限る等の制約を設けており、所蔵がかなり限られているのが現状である。

大学院で科学を学んでいくうちに、「原子を支えている根源的なものは？生命や物質を具現化しているものとは何か？」に関心をもつようになった。なぜ、原子や分子は安定に存在するのか？原子は、電氣的に正反対の電子、原子核から構成されているが、なぜ原子として安定に存在するのかは、未だに謎であろう。もちろん、大学の初年次の教科書には、ボーア模型の記述があり、諸条件により、原子は安定に存在しているという説明があるが、ほんの僅かであるけれども、なぜか腑に落ちないのである。ちなみに、原子説は、ファインマンによれば、人類のあらゆる科学技術の知見のうちで最も重要なものとされている（参考文献 2）、誰も直接、原子を見たことがないのにも関わらず。

現在では、「祝福された存在として、宇宙や全ての存在との融合・歓喜」といった方面の研究に関心がある。具体的には、「存在の歓びの追求」、「ありとあらゆるものと一体化の追求」など。そもそも全ての存在は祝福されているのにも関わらず、我々が気づいてないだけなのかも知れない。

人類の智を見直すための芸術作品例

I. 総合芸術「神秘劇序幕」(スクリヤービン、ネムティン補筆) 人類の変容を予見?

ロシアの作曲家・ピアニストのスクリヤービン(参考文献3)が遺したスケッチ50枚程度をもとに、ネムティンが後半生をかけて、音楽部分のみを完成した(参考文献4)。

総合芸術として構想され、チベットからロンドンまで、観客も一人残らず一緒にパフォーマンスを構成して行進する。音楽や舞踊のみならず、光、香りとかも入れる構想であった。現在、入手できるのは、序幕の音楽部分のみである(参考文献4)。それでも、CD3枚組となる大部な作品である。I.宇宙 II.人類 III.変容の三部からなる予言的な作品であり、人類の変容を目指しているかのようである。

II. SF小説「タイムマシン」 H・G・ウェルズ/著

作品の末尾からの引用「うれしいことに僕の手許には、タイム・トラヴェラーのポケットにはいついた、あの不思議な白い花が二つある——今はすっかりしおれて茶色になり、べちゃんこでぼろぼろになりそうだが——この花こそ、たとえ人類の英知や力が失われるような日が来ようとも、感謝の念やたがいに慕い合う情(こころ)だけは、なお人間の心臓のどこかに生き残るといふことの証拠なのだ。」(参考文献5)この中で、「たとえ人類の英知や力が失われるような日が来ようとも」については、人類の将来に対して危機感を抱いていたことがうかがわれる。本質は「愛」にあるということ、シャガールなどの多数の芸術家が指摘する通りである。

III. SF小説「ガリヴァー旅行記」 スウィフト

構成を中心に全体を見ると、第1章「リリパット(小人)の国」、第2章「ブロブティンナグ(巨人)の国」、第3章「天空の島(ラピュタ)」、第4章「馬とヤフー(人類)の国」(参考文献6)となっている。第1,2章は、世界各地に神話として残る巨人伝説の影響を受けたものと考えられる。第3章は宮崎駿の映画に影響を、第4章はwebの世界に影響を及ぼしているのは明白であろう。着想が素晴らしく、人間を考えるための各種状況として興味深い。

IV. 芥川龍之介「蜘蛛の糸」

蜘蛛の糸が切れたのはなぜか?芥川が語るように、毘陀多(かんだた)の無慈悲な心だけなのか?(参考文献7)もしかすると、本当に重量過多となったのでは?運と関係あるのか?

その後、どうなったのか?と勝手に想像してみる。例えば、何回も糸が降りてきても、その都度、誰かによって切られてしまった場合、どのように考えればよいのか?

このように考えると、短編であるが、味わい深いものがある。

V. 小説「1984」、「ユダの福音書」

この二つの著書に共通するテーマは、裏切りである。

「ユダの福音書」(参考文献9)では、キリストがユダに自分を裏切るように命じたという衝撃的な内容が語られている。

「1984」(参考文献8)では、童謡「大きな栗の木の下で、仲良く遊びましょう」のパロディ「大きな栗の木の下で、仲良く裏切った」が何度か出てくる。ディストピアの作品として知られるが、裏切りも大きなテーマとして扱われている。なお、 $2+2=5$ という記述が出てくるが、なぜ、 $1+1=3$ 等にできなかったのか?不思議である。

VI. 漫画「北の土龍」 石川サブロー

画家の創造生活を描いたもので、1981年頃の「ヤング・ジャンプ」誌に連載されたものである(参考文献10)。芸術家にとって一番重要なことが語られている、「自分自身を信じること」。もちろん、研究者、教育者、思想家も同様であろう。芸術作品鑑賞の極意にも言及されており、「作品を創作した時の作者の気持ちになつてみる」ということであるが、これは鑑賞する側の精神性が作者と同等かあるいはそれ以上でなければならず、芸術鑑賞の道標を示したものである。

VII. 一円黄銅貨 発表時に付録として配布した一円黄銅貨について

一円黄銅貨は、昭和23年~昭和25年の3年間で総計451,170,000枚発行されたものである(参考文献11)。戦後発行の円硬貨の内、現行貨では無い唯一の貨幣である。

硬貨という身近なものであるが、多面的に考えることにしよう。物質として見ると、真鍮のかけらにすぎない。戦時中の葉きょうを再利用したため、銅と亜鉛の品位があいまいである。ちなみに、品位は銅 600~700、亜鉛 400~300 となっている（参考文献 11）。歴史の証人、時代の鏡として考えることにして、一円硬貨の歴史をたどると、明治初期は、金貨、銀貨であった。銀貨は、大正初期まで発行された。終戦後のハイパーインフレのため、一円黄銅貨は発行後 5 年程度で廃止され、昭和 30 年から現在のアルミ硬貨へと変遷した。芸術作品として考えれば、円形の真鍮板のデザイン加工品として見ることも可能である。

最近は、女性誌を中心に雑誌の付録がメインになるようなケースが多いので、それにちなみ、一円黄銅貨を配布したものである。

思索のためのヒント

色々な芸術やできるだけ多くの物事に接するようにする。多面的な見方と想像力は強力なツールです。寛容な精神を持ち、安易に他者を裁かない。

考えている問題とは、一見関係が無いように思えても、考え続けていれば、繋がりが見える時がやってくる。難問に関しては、すぐに結論を出そうとはせず、保留にしておき、考え続けることが肝要である。

自分を信じること、常に楽観的であることが重要である。もし、不運な目に遭っても、得られるものは必ずある、たとえ、失いものが多くても。

本発表では、「神秘劇序幕 Preparation for the Final Mystery」を扱ったが、「我々の旅（神秘劇）への序章 Preparation for Our Mystery」となるべく祈念している。皆様の智と芸術の旅が、祝福に満たされたものでありますように。

参考文献

- 1) 「人は生まれないほうが良く、死は生に勝る」 大橋一隆
第 7 回・智のシンポジウム 論文集 2014
- 2) 「力学 ファインマン物理学 I」 ファインマン、岩波書店 1977
- 3) 「スクリヤービン 晩年に明かされた創作秘話」 レオニード・サバネーエフ 音楽之友社 2014
- 4) 「神秘劇序幕」(スクリヤービン・ネムティン補筆)
アシュケナージ指揮 ポリドール POCL-1916~1918 (CD3 枚組) 2000
- 5) 「タイムマシン」 H・G・ウェルズ、角川文庫、2002
- 6) 「ガリヴァー旅行記」 スウィフト、岩波文庫 1980
- 7) 「芥川龍之介全集 2」 p.227~231 岩波書店 1977
- 8) 「1984」 ジョージ・オーウェル ハヤカワ文庫 2009
- 9) 「ユダの福音書」 マービン マイヤー他 日経ナショナルジオグラフィックス 2006
- 10) 「北の土龍」(全 21 巻) 石川サブロウ 講談社 1982 頃
- 11) 「日本貨幣カタログ 2016 年版」 日本貨幣商協同組合 2015